

森の錬金術—ツバメの巣の生産から消費まで

佐久間香子

皆さん、こんばんはという時間なのかどうか分かりませんが、初めまして。立命館大学の佐久間香子と申します。きょうのタイトルは、先ほどご紹介いただきましたように、「森の錬金術」。何が錬金術なんだというのは、お話の中でぼちぼちわかっていくようにお話ししていきたいと思えます。

先に発表内容をいってしまいますと、きょうの発表は、私これまでいろんなところでお話しすることがあったのですが、これまでは生産は生産で、消費のことは消費だけでお話ししてきました。なので実は、生産から消費まで、全部通してお話しするのはきょうが初めてです。全部お話しするのはかなりスキップするかもしれないんですけども、一通り、森から採れるものがこんなふうにして変わっていくんだという、グラデーションのようなものを皆さんがイメージできるようにお話しできればと思います。

発表の内容は、まず、ツバメの巣をとっている人たち、交易している人たち、森から出す人たちでお話をします。その次に、ツバメの巣を消費する人たちです。ここでご紹介するのは、香港の事例も入れたかったのですが、ちょっとさすがに人の発表時間まで食ってしまいそうなので、マレーシアの華人たちにしたいと思えます。

1. ツバメの巣とは何か

まず、ツバメの巣とは何かという話からはじめたいと思えます。本日ご登壇いただくマリア先生のヨーグルトに比べると余りにもなじみのない食材です。ツバメの巣の起源に関してはいろんな説があります。楊貴妃が食べていたといった話もありますが、文献でたどることのできる限り、最も古いのは明王朝です。その時代に港にいた自称100歳を超えるという老人に皇帝が聞きました。「おまえは何でそんなに長生きなんだ」と。その老人はその場で答えることなく、長い長い手紙を皇帝に書いて返事に代えました。そこに書かれていたのがツバメの巣の秘密だったという逸話が残っています。それ以後、皇帝と一部の特権階級の間のみで消費されていた不老長寿の薬として消費されるようになったのが始まりとされ、それ以降、一部の人しか手に入れないものなので、翻って富や権力、威信の象徴としてもツバメの巣が扱われるようになり、さらに時代が進んで清王朝のときに、都市中間層も増加してきて消費者層が拡大します。ただ一部の特権階級に限定されたぜいたくな嗜好品である点は現在でも変わっていません。

近年、華僑、華人は、チャイニーズ・ディアスポラといわれるぐらいですから、地球大の離散をしています。今世紀以降の中国の経済成長などなどの要因が、ツバメの巣の消費者層をぐっと広げております。ここに書いてあるように、今でもやはり高級食材であるという点は変わり

ませんので、海のキャビアなどとも呼ばれている食材です。

この写真（ツバメの巣の販売の様子）は、マレーシアの商店で撮影したものであり、この下にあるのはナマコですね。ツバメの巣と同じように売られています。その上にみえる結構きれいな赤い箱に入っているものは、ツバメの巣がパッケージ化されたギフト用品です。

2. ボルネオ島で採集されるツバメの巣

私はずっと森の中に住み込んでいました。私が調査していたボルネオの村では、森の男たちが時々いなくなる。どこで何をしているのかと思ったら、洞窟にこもって（ツバメの巣）採集しているのです。私もついて行ってみました。ここのツバメは、日本で5月に営巣するツバメとは全然違います。完全に別種類のアナツバメと呼ばれるもので、壁にこうやって営巣します。それを竹で足場を組んで、さらに竹の棒で突っついてその巣を採るわけです。一部の人は心配されるかもしれませんが、彼らはひなが巣立ってから巣しか採りません。アナツバメは年に二、三回営巣します。だから、巣を一度採っても数カ月後にはまた新しい巣をつくっています。このツバメの巣を採るためだけに、男たちは洞窟の中にキャンプを張って住み込みます。

このようにツバメの巣の採集は、なかなかひどい環境での過酷な労働であり、不安定な足場で死と隣り合わせの作業なのです。数週間から数カ月にわたって洞窟に住み込みます。お風呂、トイレ、ベッドはありません。この写真があるということは、私もそこにいたということなんです。つらかった。でも、これは村の人からしたら一度に莫大な富が手に入る仕事です。彼らは、年に二、三回、金に困ったら洞窟に行こうぜみたいな感じで採集に出かけて行くわけですよ。そうすると、1年間遊んで暮らせたり、特に豪遊するわけではないですが、少なくとも出稼ぎに行かなくてもよいというぐらいの収入を、森の人たちは森にいながら手に入れることができる、そういうものなんです。

今回のタイトルにつけました錬金術についてです。ツバメの巣の原料は、後でもお話ししますけれども、アナツバメの唾液なんです。しかも石灰岩の壁にひつついた、こんなもの取るに足りないものだし、人によってはごみというか、ごみ以下かもしれません。それは、そこに価値を見出さなければ何物でもないんです。でも、それは宝になったんですね。宝だからこそ、このように森の人たちも血眼で採るわけです。その変化を今回の発表では錬金術という言葉で表現しました。取るに足りないものを宝に変える森の錬金術。では、どんなことがあるのかについて、まず生産社会、私がみてきて調査地のことをお話しして、次に中間消費も少しお話しします。消費する社会までの流れをお話しして、ツバメの巣の価値が大きく変わっていくことを感じていただければいいと思います。

この写真が私の調査地です。アナツバメというのは大体、この石灰岩にしか営巣しません。しかも、表面には出てきません。その奥の奥にしか営巣しないものです。非常に敵を警戒しているんですね。ツバメの巣の主要生産地というのはマレーシアだけではないんですが、タイ、ベトナムの沿岸部、インドネシア、マレーシアの沿岸部及び洞窟で採られてきましたし、今も採られています。その中でも世界最大の産出地はボルネオ島です。ここは私が調査してきたところです。ボルネオ島というのは、大部分がカリマンタン、これはインドネシア領です。ここ

がマレーシア領。その小さいところがブルネイ、というふうな大きな島です。この写真にあるように、古くからツバメの巣というのは森の人たちの重要な現金収入でした。ニア洞窟というのが一番有名なのですが、きょうは特に触れません。

森の村にはそれぞれローカルな政治機構があります。身分もあります。権力者がいます。権力者を生み出すということは、そこに富があるんです。それを生み出すきっかけの一つになったのがツバメの巣で、ツバメの巣がそのように作用した。つまり、権力や生態なるものを生み出してきた事例として2つお話しします。

3. ツバメの巣とかかわる権力機構

まず1つ目が、村の名前はAというところで、この地図の赤いところです。マレーシア・サラワク州は、ボルネオ島の北にあります。隣がサバ州です。ある程度の年齢の方なら、サンダカンとか聞いたことあるかと思いますが、それはサバ州にあります。

話は戻りまして、ここはサラワクで最も上質なツバメの巣が採れるところとして有名です。その中でもA村、いわゆるカヤン人の村として有名なのですが、ここは森の中にあるんですけども非常に大きな村です。ここは19世紀頃からかなり栄えていました。その繁栄を支えていたものがツバメの巣なんですね。ここに“ツバメの巣の女王 (Bird's nests queen)” などとも呼ばれていた伝説の女王がいるわけですね。この村の女性首長でした。彼女は、プンフル (PENGHULU) という称号を持っていました。プンフルという称号は、村と村、幾つかの村をさらに統括する地域のリーダーを示しています。その称号を持っているかなりの権力者だったんです。この村はツバメの巣の交易により莫大な富を築いた、その女性首長が彼女です。1940年代にしてA村は98戸もの世帯数を持っていたと。98戸というと、日本の農村からしたらそんなに人口規模は大きくないじゃないか、と思われるかもしれませんが、ここは森の奥地です。特にバラム川流域は、人口密度がサラワクの中で最も人口密度の低い地域で、この規模の村を維持できたことは、かなり凄い権力を示しています。

さらにおもしろいのは、民族間関係もツバメの巣によって規定されてきたことです。彼女をふくむカヤンの人たちは、基本的には焼畑農耕も狩猟もしながら、村（ロングハウス）に定住してきた人たちです。他方、ここに写っているプナン人、彼らは狩猟採集民として有名です。彼らは特に村というものをつくらない人たちです（今は彼らの多くが定住生活ですが）。そのプナン人たち、A村の領域である洞窟の入り口の番をしたりするという、こういう民族間関係もできているのです。つまり、ツバメの巣の最終と交易活動が、地域内での民族関係や権力を生み出してきたのであり、その例がA村です。

私が一番長いこと住み込んでいたB村もそうなんです。B村の人々もツバメの巣を採っていました。彼らは、このあたりで最初に住み出した集団であると、伝説の神話の中でもそういわれていますし、彼らの口承伝承では今でもそのように語られています。ここはちょっと特異な場所です。山1つ越えたここが村です。何代かかわっているんですが、大体このあたりに村が建てられてきました。ちょっと山を越えたらもうブルネイ王国です、あのお金持ちの。ブルネイ・スルタンにすぐに川に沿ってここに行ったらもう南シナ海で、有名なバンダル・スリブ

ガワンだとかスリアとか、海洋交易時代から栄える大きな港があって、王国の中心地があります。私は19世紀終わりのころ以降のB村の状況を、聞き取りと歴史資料で調査してきました。19世紀末はまだ、ブルネイが今のように石油ではなく、港市国家として交易によって繁栄していました。調査していたB村は、サラワク王国の領地だったのですが、サラワク王国内の商人と交渉が決裂すれば、ブルネイに売りに行くことだってできる。つまり、後背地が港市を選んでしまうことができたんです。

また、この下流へ行けば、またマレーシア側、当時はサラワク王国でしたが、サラワク王国の港に運ぶことができる。さらに、これより上流は非常に川がうねうねというか、流れが激しいので、この川をここより先を通れる人というのは、ボルネオの中でも最上のボートの扱い手でないとここには行けないというふうにエスノグラフィーでも書かれているぐらい、ちょっと過酷な川なんです。そこを制したのが彼らB村の祖先だったんです。彼らはこの洞窟で、数世代にわたってツバメの巣を採集し、ブルネイ・スルタンに使えるマレー人商人、サラワク王国の庇護の下で商いを営む華人仲買人などと交渉して、富を獲得してきました。

次にお示したいのは、このB村の立地が、河川をベースにした森の中の交通の要所であったことです。B村以上に暮らす狩猟採集民も貴重な森林産物をB村に持ち込んで、ここで交易をすることができた。なぜなら、ここが分水嶺、交通の要所だからです。ブルネイからも買いに来ることもできる、サラワク王国から買いに来ることもできるという、そういう要所であったことも、この村が繁栄した要因なんです。人口も増え、政治的にも周りの村々に対しても力を誇るようになってきましたし、経済力もつきました。

ここでも当然、首長というものが誕生してきました、首長層が長大な自分たちの前の首長は誰々で前の首長は誰々というふうに系譜を語り続けるんです。首長層である証というのは何なのかというと、首長の系譜を語るができること。つまり、知識が首長層の人間であることの権威の証なんです。その権威を支えていたものが、これら森で採れる林産物だったのです。

このように2つ、ツバメの巣があることによって村が繁栄し、政体をつくり出したという例をお話ししました。

4. ツバメの巣の消費形態—贈答品から健康食品まで

それでは、誰が、いつ、どうやって食べているんでしょう。食べている人の話を聞くと、これまた、いろんな話が出てきました。ツバメをめぐるマレーシア華人の発話を4つのタイプに分けてお話しします。

まず、妊婦です。私は、妊娠7カ月まで、サラワクで調査していたんです。7カ月を超えると国際線には搭乗できないんです。ある日、サラワク州の州都クチン市内の華人のおばちゃんとおはなを食べていたときに、彼女が私に「もうツバメの巣を食べなあかんよ」というんです。「あなたが私の娘なら、私はあなたにツバメの巣を贈る」と。「娘が妊娠したら、私はそれを贈るに決まっているじゃない。日本人は贈らないの？ 食べないの？」というんですね。

妊婦に贈るツバメの巣としてはいろんな話があります。基本的には下にあるように、ツバメの巣というのは日常的に食べる物ではありません。華人だからって毎日なんて食べないよ、と

いわれる。でも、妊娠6カ月から授乳期までは、ちょっと経済的に財布が苦しくても食べたほうがいい、というのをやたらいわれるんですね。「あなたのお母さんが贈ってくれないのか」などと聞かれるんですけども、日本人だからそんな贈られたこともありません。とにかく、妊娠中に食べなければいけないわ、と力説されたのがツバメの巣だったんです。

じゃ、ほかにどんな食べる様式があるのかと思って、ついでにいろいろ聞きますと、ツバメの巣は春節のギフトには欠かせないといいます。これがクチン市内の商店で売られている春節ギフトセットです。春節の時期になると、こういうセットがたくさん店頭に並びます。1月下旬から2月にマレーシアへ行ったら、こういうセットが至るところで売られると思います。子孫繁栄の願いが込められているから縁起がいいそうです。

消費の様式を考えると、養殖物と天然物の違いが重要になってくることがあります。天然物は、先ほどのスライドでおみせしたような洞窟で採れたものです。養殖物というのは、いろんなショップハウスだとか、あるいはツバメの巣専用の建物を建てて、その中に営巣、巣をつくらせるということです。ここ10年ほど、サラワクでは結構はやっています。ここでポイントなのは、日本のウナギのように、養殖物だから薬、抗生物質をいっぱい入れているとか、養殖はおいしくないとか、運動量が足りないから肉の締まりがないとか、そのような「養殖だからダメ」という話は全然聞かないことです。実は私も、そういう話を聞くんだらうな、なんてある程度想定してインタビューしたのですが、実際はそうではありませんでした。それは好みなんだというんです。好みというのは、養殖物のほうがもっと繊細で細い、ちゅるっと飲み込みやすいんだそうです。天然物、洞窟でとれたものは繊維が太いとよくいわれます。のどこしがいいと、ごっくんと飲み込んだ感じがしっかりするのが洞窟物、天然物だそうです。

でも、妊婦が食べるのに一番いいとなると、それは、ニア洞窟のツバメの巣が一番いいんだと、これまた細かい話をしてくれるわけですね。万事こんな調子でインタビューは続き、こういうときにはこれがいいとか、こういうときにはこう料理をするというレクチャーを受けることになりました。

妊婦さんばかりがありがたがって食べるのかといえば、そうでもありません。また全然違う話が、若い女性からは出てくるんですね。私が留学していたマレーシア・サラワク大学というところの女子大生がある日、変なことをいったんです。フェイシャルエステに行こうか、ツバメの巣を買うか、どっちにしようかなという。当時、私はマレーシア・サラワク大学に留学したのは、おみせしたように森に行くため、森で調査したかった。そのために留学していたし、それなりに留学生としての学生生活も送っていましたけれども、基本的にはもう全部、森に行くためのステップだし、頭の中は森のことでいっぱいだったのに、友人がフェイシャルエステとかツバメの巣とかいっているから何をいっているんだらう、と思いました。でも、彼女は彼女なりに真剣にいていたんです。

そもそもツバメの巣というのは、アナツバメの唾液であることは先ほどもいいました。改めて確認しますが、唾液なんです。それが、私が知らなかっただけで、真の乙女は知っているんでしょうけれども、美容業界から実はすごい熱視線を向けられている資源でもあったわけですね。有名な女優さんが広告塔になっている、このツバメの巣を使ったサプリメントや化粧品ブランド、すごいお値段ですね。よくよくみたら、「天然ツバメを使っています」とあり

ます。やっぱり日本では天然ということの方が付加価値、市場価値が高いんですね。マレーシアの華人に聞いたら、天然でも養殖でもそんなことは関係ないよという話が出てくるんですけども、なぜか天然物至上主義ですね、日本の市場は。

このスライドにお示した広告をよく読むと、「希少価値の高いマレーシア山間部でとれた天然アナツバメ」というふうにも書かれています。このように、美容関係者からも注目される資源という消費の仕方もあります。それは日本だけではなくて、実際、マレーシアの華人の女の子が、女子大生がそうやって悩むぐらい、結構ポピュラーなものだったんですね。

もう一つ、おもしろいと思ったのは、マラヤ大の先生の話です。彼女は「毎日少しずつ食べるの、私は」といって、その調理方法を教えてくれました。ツバメの巣をボイルして、少量の砂糖を入れて煮込んだものを瓶に詰めて冷蔵庫で冷やしておきます。この時、砂糖の代わりにハチミツを入れるのは絶対にダメなんだそうです。ハチミツの方が健康にいいイメージがありますけどね。それを毎朝、ティースプーン1杯だけ、朝ご飯の前に食べるのだそうです。これは何にいいかというと、肺か喉にすごくいいというんですね。

なぜ彼女が肺や喉に気を遣うかといいますと、マラヤ大はクアラルンプール、つまりボルネオじゃなくて半島部のほう、半島マレーシアではインドネシアからのヘイズ（煙害）の影響を受けた地域です。ヘイズについては後でいいます。彼女は「大陸の大気汚染の影響も受けるのよ、半島は。だから、ツバメの巣は絶対要るの」というんです。

じゃ、ヘイズとは何じゃということをお話します。今日、パームオイル、油ヤシ、いろんな言い方をしますが、パーム油というのは世界中で使われていますし、日本のパーム油と無縁の生活をしている人なんて、多分、この部屋で一人でもいるかいらないか、恐らくいないと思います。このパーム油というのは化粧品でも加工食品でも何でもかんでも使われている便利なオイルです。これの消費拡大を重ねてきたのは、マレーシア、インドネシアです。その熱帯雨林がなくなる。それをプランテーションに変えるんですが、プランテーションに変えるときに火入れをします。森を燃やします。そのときの煙が人間ではちょっともう制御できないほど燃え広がってしまい、今アマゾンで起こっていることです。そういうことは毎年恒例行事のように、マレーシア、インドネシアでは森が燃えています。それが2015年は特にひどかった。この年はエルニーニョの影響を受けたせいでものすごく被害が広まりました。

このときからこのマラヤ大の先生は、このように調理したツバメの巣を呼吸器疾患の予防として家に置いておくようにしたと。この用法は、実は中国大陸に住んでいる親戚から聞いたんだそうです。中国大陸はもう大気汚染というのがもっと前から深刻化していたから、こういう使い方をするのだと教えてもらったとのことでした。

では、その煙害がどれだけひどかったかという話なんですが、これは当時、イギリスのNGOがマッピングしたのですが、この点々は全部出火しているところです。これだけの森が燃えました。私が調査したサラワク州というのはここですね。特にひどかったのが中央カリマンタンとスマトラ島のリヤウのあたりですね。この辺の泥炭湿地林はほぼ燃えました。ここに書いてあるように、視界がすごく悪くなったと。この年、2015年のインドネシアの泥炭湿地の火災により排出された二酸化炭素は16億4,000万トン、日本の年間排出量を上回る量がこのときに排出されたというぐらい、世界でも話題になりました。この赤い四角で囲われたところをNASA

の衛星画像が撮って公開したのがこの画像です。これは全部煙です。だから、もう飛行機も飛べなくなったんですね、この年は。そのくらいに広範囲にわたる被害が出て、マレーシア、シンガポールなど近隣の国々にも影響がありました。

連日、この年はさまざまな健康被害が報じられました。ガーディアンでも、煙害がひどい地域では約50万人が呼吸器の疾患、10万人以上が早死にするリスクが高まったとか、インドネシア政府は、今回の煙害により慢性呼吸疾患を患った人々、特に老人や幼い子に対する対策として空気清浄機を別途与えたとか、いろいろいわれていますが、火災が発生した7月以降、カリマンタンとスマトラ両島合わせて少なくとも50万人がやっぱり呼吸器系を患ったと。学校も閉鎖されました、役所も閉鎖されました。あらゆる機関が閉鎖されたという事態に陥りました。こういう報道と、実際に目の前が見えないという状況を経験した人たち、そういう人たちにとって、ツバメの巣でも何でもとりあえず、実際に身近に迫った死の危険でもあったわけですね。それに備える一つとして、ツバメの巣が位置づけられることになったのです。

以上の発話をまとめますと、妊婦への贈答品や春節の贈答品など、これまでの華人社会のいわゆる伝統的なもの、あるいは典型的なイメージから逸脱することはありません。ギフトとしてのツバメの巣をみた場合、使われ方は女性に限定しているわけではありませんけれども、いわゆるリプロダクション、つまり出産し、子孫を残す、子孫繁栄ということに絡めて説明されます。つまり女性の生命力の活性化への期待がこれらのやりとりではみられます。

他方、エステや大気汚染対策としては違う側面が見受けられます。つまり、時代状況によって読みかえられていることをよく示しているのです。別の解釈がそれぞれに付与されてきた経緯がここからは見えてきます。

ということで、かなり強引に、森からツバメの巣を食べる人たちまで、があっとみてきました。まず、まとめたいと思います。

5. ツバメの巣をめぐる人々の営為から見えること

採る人びとの営為から、ツバメの巣を採ることとは一体何なのだという事です。まず、バラム川流域、森の奥の奥の人たち、彼らは自分たちで採ったものを華人商人のネットワークに乗せてどんどん下流へ出荷していきます。自分たちで商売するわけではありません。彼らは採集し、華人商人に売り渡す、そこまでなんです。そこまでなんです、彼らの暮らす森の社会にとっては重要な生業活動の一つだった。つまり首長層の権威を担保する資源として、ツバメの巣が重要な役割を果たしていた。例えば、ゴングだったり、中国本土から来た大きな陶器の壺などが首長層にとって威信財でした。そういうものを購入するにも、ツバメの巣があるのとは全然違うんですね。他にも、大規模儀礼、特にお葬式です。大首長などが死んだときは大規模なお葬式が開かれます。一晩では終わりません。延々と儀礼が続くんです。儀礼ではやっぱり食物を分けないといけない、あらゆる来た人に全部食べ物を与えなければ、分配しないといけないんですね。それにはかなりの財が要る。その儀礼を支える財源としても、やはりツバメの巣があったんです。ツバメの巣が採れる土地とのつながり、その土地とのつながりを系譜とともに詠唱することができる、覚えているということが、首長にとっては自らの首

長としての正統性を主張する根拠にもなってきた。そういうものとしてツバメの巣は採る側の社会で位置づけられてきました。

では、食べるほうはどうなのでしょう。最初の方にお話ししましたように、ツバメの巣は、中国の王朝では皇帝たちが食べていた不老長寿や永遠の美などを約束するものでした。皇帝とか本当に一部の人たちにとってのぜいたくな嗜好品だったのが、時代とともに変わってきていました。妊婦への贈答品という価値付与は、恐らくもっと前から、健康食品よりも前からあったでしょう。春節の贈答品として使われるようにもなりました。かといって、これら贈答品というのはそんなに日常のものではないですね。妊娠という人生で何回あるかないかみたいなライフイベントですし、春節、あるいは年間のイベントですね。

でも、それに対してもっと日常的な摂取の仕方、消費の仕方が出てきました。それが健康食、例えばマラヤ大の先生がいていたような、少しずつティースプーンに1杯ずつ食べるという実践も、彼女は毎日のこととしてやっていましたし、サラワク大学の大学生にみるように定期的に、お財布に余裕があればエステかツバメの巣かと悩むという、そういうふうなかなり日常的に近いもの、消費の仕方が現在に登場してきたのです。さらに、食べ方、用法や状況というのは間食の好みなど、さらに食べ方、そういうものが細分化し個人化するという傾向をみてきました。

このように、ツバメの巣は時代状況によって読みかえられてきたものでした。でも、それはもとをみると全部が森から来ているものなんですね。このようにツバメの巣というのは、時代によってもそうですが、場所によってかなり価値が変わってくる、意味づけが変わってくるものでもありました。こういうのを今まで余りなじみのない食材かもしれませんが、物の移動とともにそれに付与される言説が違って、それが社会的に持つ価値まで違ってくるというのを生産から消費までみてきました。私の発表は以上で終わりです。どうもありがとうございました。

○小川 佐久間さん、ありがとうございました。佐久間さんのご発表のポイントをまとめようかなと思いましたが、古川さんの役割を奪うといけないなと思って。早速、ヨトヴァ先生にご登壇いただきたいと思います。